津軽疎開時代の太宰文学の一側面
── 戦後文学と聖書 ──

長　濵　拓　磨

〈요약〉
다자이 오사무(太宰治)는 1935 년이후, 전쟁중, 전쟁후도 일관해서 작품 안에 성서를 계속 인용한 작가다. 그 것은 다자이(太宰) 문학에 있어서 성서의 역할의 크기를 나타내는 것과 동시에, 다사이(太宰)가 전시하에서도 일관한 문학적 태도를 취해 온 증거가 되자. 거기서, 본고에서는 1945 년 8 월 초순부터 1946 년 11 월까지의 쓰가루(津軽）대피 시대의 작품에 초점을 맞추고, 다사이(太宰)가 작품 안에서 어떻게 성서를 인용하고, 어떤 의미가 담겨져 있는지 고찰했다. 그 결과, 자유 사상, 이웃사랑, 사해,교훈의 4 개의 위상이 떠올랐다. 즉, 다자이(太宰)는 전쟁후의 혼란 안에서 성서, 혹은 그리스도(Christ)에게 새로운 사상이나 이상의 삶의 태도를 찾아내고, 작품에 투영한 것이다.

は　じ　め　に

太宰治は生涯にわたって聖書を読み続け，その影響から多くの作品の中で聖書を引用した作家である。どんなに作品の中で聖書を引用しようとも太宰とキリスト教信仰は全く関係ないとするドナルド・キーンの批判[1] はあるものの，太宰と聖書の関係は太宰の身近にいた山岸外史，小山清，今官一，菊田義孝などとの影響関係[2] や，野原一夫[3]，津島美知子夫人[4] などの貴重な証言による裏付けがあり，作家の長部日出雄[5]，清水昭三[6] による論究や多くの研究者[7] による詳細な論究があり，無視できないものとなっている。

太宰の作品の中では既に習作時代の「無間奈落」（「細胞文芸」，1927 年 5 月）と「地主一代」（「座標」，1930 年 3，5 月）に聖書と関連のある言葉が出てきており，小説「ダス・ゲマイネ」（「日本浪漫派」，1935 年 10 月）以降は戦中，戦後も一貫して作品の中で聖書を引用している。このことは，太宰が戦争を通しても変節をせずに一貫した文学的態度を取ってきた証左と言える。もちろん，時代ごとにまた作品ごとにどのような聖書の引用があり，作品の中でどのような意味を持っているかは一つ一つの作品にあたって検討する必要があるだろう。そこで本稿では特に太宰が 1945 年 8 月初旬から 1946 年 11 月まで津軽で疎開していた時期に執筆された小説や戯曲に焦点をあてて，そこにあらわれた聖書の引用箇所に注目し，その位相を確認していきたい。

津軽疎開時代[8] と呼ばれるこの時期に太宰は小説としては「パンドラの匣」（初出：「河北新報」，1945 年 10 月 22 日～1946 年 1 月 7 日）から「トカトントン」（「群像」，1947 年 1 月）まで

の 16 作品を，戯曲として「冬の花火」（「展望」，1946 年 6 月）と「春の枯葉」（「人間」，1946 年 9 月）の 2 編を執筆している。その中で，はっきりと聖書の引用が確認できるものは，「パンドラの匣」，「十五年間」（初出：「文化展望」，1946 年 4 月号），「苦悩の年鑑」（「新文芸」，1946 年 6 月），「冬の花火」，「チャンス」（「芸術」，1946 年 7 月），「春の枯葉」，「親友交歓」（「新潮」1946 年 12 月），「トカトントン」である。以上の作品にあらわれた聖書引用を中心に考察する。

1．自由思想～「パンドラの匣」

戦後第一作である『パンドラの匣』の原型は戦中に始まる。津島美知子[9] によると，『パンドラの匣』の原型は，太宰の愛読者であった木村庄助の日記 10 冊をもとに 1943 年 10 月末に脱稿された「雲雀の声」であった。「雲雀の声」が戦時中の検閲にひっかかり出版許可がなかなか下りず発行が延びているうちに，印刷工場が戦禍に遭い，原稿も失われてしまった。だが，その後奇跡的に校正刷が見つかり，その原稿をもとに内容を敗戦後のことに書き改めて「河北新報」に連載をしたのが『パンドラの匣』である。

『パンドラの匣』は，「健康道場」で結核療養中の「ひばり」と呼ばれる 20 歳の青年が親友へ宛てた手紙の形式をとった新聞小説である。作中の日付を見ると 8 月 25 日から 12 月 9 日までの合計 13 通の手紙によって構成されている。中心となるのは「健康道場」における「ひばり」の療養生活であり，この中で入院患者たちとの交流や，看護婦の「竹さん」への失恋[10] などが描写されている。「安全無害なジュニア向きの作品，愛と克己と希望とが軽いタッチで語られているきわめて衛生的な明朗青春小説」[11] と塚越和夫が論じているように「青春小説」として規定することも可能である。だが一方で『パンドラの匣』に，敗戦後の日本社会での生き方をめぐる「思想小説」の側面もあることは見逃すことはできない。次作の「十五年間」の最後に引用されたのは，聖書や天皇とも関連する「自由思想」が語られる部分が中心となっており，その重要性は明らかであるからだ。そこで『パンドラの匣』の「思想小説」としての側面を探っていきたい。

作品冒頭で主人公の「ひばり」は，8 月 15 日を境に日本は新しい時代に入ったのだから，「古い気取り」はよして「希望」をもって進んでいこうと友人に呼びかける。ギリシャ神話の「パンドラの匣」のように，「絶望」の中にも「希望」が残されているからだという。これが題名の『パンドラの匣』の由来であり，作品全体を流れる通底奏音である。この答えを「ひばり」が迷いつつ模索するところが「思想小説」としての作品の骨子と言えよう。そんな「ひばり」に対して思想的に多大な影響を与えるのが同室の「越後獅子」である。最初「ひばり」は年上で東京の新聞記者という「越後獅子」に多少威厳を感じているものの，それほど尊敬はしていなかった。「越後獅子」が聖書を引用しつつ独自の「自由思想」を展開して演説をした「嵐の夜の会談」の時も，友人が「当代まれに見る大政治家」「有名な偉い先生」と絶賛しているのに対し，「巷間無名の民衆」が「正論」を吐いているに過ぎないと極めて冷静な反応を見せている。しかし，見舞いに来た友人によって「越後獅子」が実は「大月花宵」という有名な詩人であることを知ってか

らは，態度を一変させ心酔者の一人として「自由思想」を自分の思想の中へ取り込むようになり，そこから「かるみ」の論まで生まれている。そして，最後の手紙の末尾には「献身」と題する「越後獅子」の講話が引用され，講話を聴いた余韻に浸っている「ひばり」の感銘で作品が閉じられている。つまり，「青春小説」としての『パンドラの匣』は「竹さん」の結婚が決まったことを知り，「ひばり」の失恋が決定的になるところまでが主眼であるのに対し，「思想小説」としての『パンドラの匣』は新しい生き方を模索している「ひばり」が「越後獅子」の「自由思想」を通じて，「かるみ」の境地に至るプロセスが主眼であるのだ。

では「越後獅子」の「自由思想」とは何か考察していきたい。「越後獅子」の「自由思想」は「キリストの精神」を中心として展開される。「越後獅子」が最初に「自由思想」について演説したのは次の場面である。

> 「自由思想の内容は，その時，その時で全く違うものだと言っていいだろう。真理を追及して闘った天才たちは，ことごとく自由思想家だと言える。わしなんかは，自由思想の本家本元は，キリストだとさえ考えている。思い煩うな，空飛ぶ鳥を見よ，播かず，刈らず，蔵に収めず，なんてのは素晴らしい自由思想じゃないか。わしは西洋の思想は，すべてキリストの精神を基底にして，或いはそれを敷衍し，或いはそれを卑近にし，或いはそれを懐疑し，人さまざまの諸説があっても結局，聖書一巻にむすびついていると思う。」
>
> （傍線部引用者／『パンドラの匣』）

「越後獅子」は「自由思想家」を「真理を追及して闘った天才」として定義し，その「本家本元」を「キリスト」だとした上で，聖書のマタイ伝6章26節の一節を引用しながら「自由思想」としての「キリストの精神」を強調する。「キリストの精神」はこの後も繰り返してあらわれるキーワードであるが，ここでの文脈からすると「越後獅子」が説く「キリストの精神」の中心となるのは，「思い煩うな」というキリストの言葉に集約される。元来キリストが語っているのは信仰を基盤とした「神の下の平安」であるのだが，「越後獅子」はそうした信仰的要素を薄め，あくまでも人間的なレベルで「思い煩う」ことなく自由に生きることが「キリストの精神」だと言うのだ。

「越後獅子」はさらに聖書の別の個所を引用して「自由思想」を説明する。

> 醜い裏切りとは違う。キリストも，いっさい誓うな，と言っている。明日の事を思うな，とも言っている。実に，自由思想家の大先輩ではないか。狐には穴あり，鳥には巣あり，されど人の子には枕するところ無し，とはまた，自由思想家の嘆きといっていいだろう。一日も安住をゆるされない。その主張は，日々にあらたに，また日にあらたでなければならぬ。日本に於いて今さら昨日の軍閥官僚を攻撃したって，それはもう自由思想ではない。便乗思想である。真の自由思想家なら，いまこそ何を置いても叫ばなければならぬ事がある。」

（傍線部引用者／『パンドラの匣』）

ここでも聖書が引用され「キリスト」について言及されているものの信仰や宗教的要素は薄い。あくまでも「真理を追及して闘った天才」としての「キリスト」にすぎない。引用されている聖書，マタイ伝5章34節「いっさい誓うな」とマタイ伝6章34節「明日の事を思うな」は，先に引用されたマタイ伝6章26節「思い煩うな」と同様に自分を縛る拘束や心配事から自由になることを示しており，そんな「自由思想家」であるがゆえに人々から理解されずマタイ伝8章20節「狐には穴あり，鳥には巣あり，されど人の子には枕するところ無し」という不遇にも遭うのである。

さらに「越後獅子」は「昨日の軍閥官僚」を安易に攻撃する「便乗思想」を批判する。個人的な心配や不安だけでなく過去に拘泥した古い価値観からの「自由」を説いているのだ。だからこそ，「天皇陛下万歳」という次の言説が続く。

> 「天皇陛下万歳！　この叫びだ。昨日までは古かった。しかし，今日に於いては最も新しい自由思想だ。十年前の自由と，今日の自由とその内容が違うとはこの事だ。それはもはや，神秘主義ではない。人間の本然の愛だ。今日の真の自由思想家は，この叫びのもとに死すべきだ。アメリカは自由の国だと聞いている。必ずや，日本のこの自由の叫びを認めてくれるに違いない。わしがいま病気で無かったらなあ，いまこそ二重橋の前に立って，天皇陛下万歳！　を叫びたい。」　（傍線部引用者／『パンドラの匣』）

塚越和夫[12]はこの場面で「天皇陛下万歳」という言説が出てくるのを踏まえて「時代錯誤的な，危険きわまりない迷信に過ぎなかったーと今では思われている天皇への絶対的な崇拝の念」として批判している。『パンドラの匣』が論じられる際常に議論となる箇所であるが，ここで「越後獅子が強調しているのは「昨日の軍閥官僚」と同様の古い思想としての「天皇陛下万歳」ではなく，過去の残滓に捉われない「自由思想」としての天皇崇拝であるのだ。だからこそ「自由の国」である「アメリカ」も「認めてくれるに違いない」というのである。

以上が「越後獅子」の「自由思想」の概要であり，『パンドラの匣』における中心思想である。これが「健康道場」の患者たちに徐々に浸透し，患者たちは何かと言えば「キリストの精神」と口にするようになる。中でも最も大きな影響を受けた「ひばり」は「すべてを失い，すべてを捨てた者の平安」としての「かるみ」の思想にたどりつく。

「ひばり」が主張する「かるみ」の思想を渡部芳紀[13]は『パンドラの匣』の原型が戦時中に執筆された「雲雀の声」であったことに注目し，戦時中での太宰文学の流れから位置付けた。充分に説得力のある論であるが，『パンドラの匣』の「思想小説」的側面を考慮する時，別の意味も見えてくるのではないか。すなわち，「ひばり」の最初の問題提起に対する答えとしてである。「ひばり」は「古い気取り」を捨てることを最初に提起したが，そうした戦時下の古い価値観か

ら自由になること，それこそ「越後獅子」が主張する「自由思想」の本質であった。そして「越後獅子」の講話を聴いた「ひばり」が作品の結末で「私はなんにも知りません。しかし，伸びて行く方向に陽が当るようです。」と書き残したこの言葉が「かるみ」の境地を最もよく表現している。「古い気取り」を捨てて自由に生きようとする「ひばり」の「自由思想」を代弁するものである。

２．隣人愛〜「十五年間」「苦悩の年鑑」「チャンス」

キリストの隣人愛を示す言葉としてマタイ伝 19 章 19 節「おのれを愛するが如く，汝の隣人を愛せよ。」は有名であるが，これは元々旧約聖書・レビ記 19 章 18 節「あなたはあだを返してはならない。あなたの民の人々に恨みをいだいてはならない。あなた自身のようにあなたの隣人を愛さなければならない。わたしは主である。」（口語訳）という律法の言葉を引用し再確認したものである。この時期，太宰はこの言葉に深い関心を持っており，「十五年間」「苦悩の年鑑」「チャンス」の 3 作品で繰り返し引用している。それぞれの作品から確認したい。

「十五年間」は太宰が東京に出てからの「悪夢に似た十五年間の追憶の手記」である。この中では「東京八景」（初出：「文学界」1941 年 1 月号），「火の鳥」（1939 年執筆，未完），『パンドラの匣』の一部を引用することで，語り手が東京で作家として過ごした生活が主に回想されている。もちろん随想ではなく小説として発表されている以上，それらをすべて事実として捉える必要はないが，作家・太宰治が自己の思想的位相をどう表現しているのかは検討する余地がある。

作品の語り手「私」が一貫して表明しているのは，サロンへの嫌悪である。「私はサロン芸術を否定した。サロン思想を嫌悪した。要するに私は，サロンなるものに居たたまらなかったのである。」と宣言し，さらにサロンを「知識の淫売店」，知識の「大本営発表」，知識の「戦時日本の新聞」と重ねて批判を浴びせる。さらに「私」は聖書を引用しながらサロン批判を展開する。

> 自分を駄目だと思い得る人は，それだけでも既に尊敬するに足る人物である。半可通は永遠に，洒々然たるものである。天才の誠実を誤り伝えるのは，この人たちである。そうしてかえって，俗物の偽善に支持を与えるのはこの人たちである。日本には，半可通ばかりうようよいて，国土を埋めたといっても過言ではあるまい。
>
> もっと気弱くなれ！　偉いのはお前じゃないんだ！　学問なんて，そんなものは捨てちまえ！
>
> おのれを愛するが如く，汝の隣人を愛せよ。それからでなければ，どうにもこうにもなりゃしないのだよ。　（傍線部引用者／「十五年間」）

作品中でサロンについて具体的な説明はないが，ここで「私」が批判する「サロンの半可通ども」の正体が浮かび上がる。すなわち，傲慢で半可通でありながらも学問を振りかざし，偽善に

満ち，他人を思いやる愛情に欠けた人としてである。そうした「サロンの半可通ども」に対し，マタイ伝19章「おのれを愛するが如く，汝の隣人を愛せよ。」を引用することで，他人への思いやりの大切さを訴えているのだ。

そして，「十五年間」の最後には『パンドラの匣』で「越後獅子」が「自由思想」について演説する部分を引用することで結ばれている。そのことは前章で指摘したように，『パンドラの匣』の中心思想が「越後獅子」の「自由思想」であること，また『パンドラの匣』が「思想小説」の側面を持っていることを示している。

「苦悩の年鑑」（「新文芸」1946年3月）は幼い頃からの「私」の苦悩の歴史を綴ったものである。作品の末尾には「十歳の民主派，二十歳の共産派，三十歳の純粋派，四十歳の保守派。」として「私」の思想遍歴がまとめられており，『パンドラの匣』「十五年間」さらには「冬の花火」とも深い関連が窺える。また，「私」の思想遍歴の中には聖書が1か所だけ引用されている。幼時の読書の思い出を綴った次の場面である。

> それからもう一つ，私の幼時の読書のうちで，最も奇妙に心にしみた物語は，金の船というのであったか，赤い星というのであったか，とにかくそんな名前の童話雑誌に出ていた，何の面白味も無いお話で，或る少女が病気で入院していて深夜，やたらに喉がかわいて，枕もとのコップに少し残っていた砂糖水を飲もうとしたら，同室のおじいさんの患者が，みず，みず，と呻いている。少女は，ベッドから降りて，自分の砂糖水を，そのおじいさんに全部飲ませてやる，というだけのものであったが，私はその挿画さえ，いまでもぼんやり覚えている。実にそれは心にしみた。そうして，その物語の題の傍に，こう書かれていた。汝等おのれを愛するが如く，汝の隣人を愛せ。　（傍線部引用者／「苦悩の年鑑」）

本当に「私」がこのような物語を読んだのかどうかは疑わしいが，「十歳の民主派」の思想を表明するエピソードとしておじいさんに砂糖水を飲ませた少女の物語を取り上げ，しかも物語の題の傍らにマタイ伝19章19節「汝等おのれを愛するが如く，汝の隣人を愛せ」と記されていたことは「十五年間」との関連で興味深い。つまり，「十歳の民主派」の中心思想が「隣人愛」であったことを物語っているのだ。

また，「十歳の民主派」時代には世間で流行している偽善についても敏感に反応する。

> 博愛主義。雪の四つ辻に，ひとりは提燈を持ってうずくまり，ひとりは胸を張って，おお神様，を連発する。提燈持ちは，アアメンと呻く。私は噴き出した。
>
> 救世軍。あの音楽隊のやかましさ。慈善鍋。なぜ，鍋でなければいけないのだろう。鍋にきたない紙幣や銅貨をいれて，不潔じゃないか。あの女たちの図々しさ。服装がどうにかならぬものだろうか。趣味が悪いよ。
>
> 人道主義。ルパシカというものが流行して，カチュウシャ可愛いや，という歌がはやって，

ひどく，きざになってしまった。

私はこれらの風潮を，ただ見送った。　（傍線部引用者／「苦悩の年鑑」）

「博愛主義」ではキリスト教の路傍伝道の様子が人前に見せつける形での喜劇になっていることを批判する。「救世軍」は慈善事業活動を中心としたキリスト教の一派であるが，「社会鍋」と呼ばれる募金活動の仰々しさに疑問を呈している。「人道主義」でルパシカを着ているのはトルストイのことであり，トルストイの人道主義を浮薄な流行現象としている。いずれもキリスト教に関連するものであるが，ここで「私」はそれぞれの偽善を見破り，冷静に見送っている。先の幼時の読書についても「私」は自分の思想やキリスト教信仰に関連づけられる事を避けていたが，同様に自分の思想が世間の風潮として見られる外面的なキリスト教とは一線を画すことを示している。

次に「私」の回想は1931年の満州事変に続き，軍国主義化していく時代の流れの中で純粋へのあこがれを表明する。注目すべきはここに「キリスト」という言説が表れる点である。

私は，純粋というものにあこがれた。無報酬の行為。まったく利己の心の無い生活。けれども，それは，至難の業であった。私はただ，やけ酒を飲むばかりであった。

私の最も憎悪したものは，偽善であった。

×

キリスト。私はそのひとの苦悩だけを思った。　（傍線部引用者／「苦悩の年鑑」）

ここでの文脈から考えると「私」が「キリスト」を純粋な存在，偽善のない姿として捉えていたことは間違いない。ただし，「私」が共感する「キリスト」は「神の子」としてよりも「苦悩」を抱えた「ひと」であることは注意が必要であろう。

「チャンス」は「恋愛とは何か」をめぐる議論を「私」が展開する前半と弘前の高等学校時代に「私」が経験した芸者との恋愛めいた話が語られる後半の2部で構成された小説である。前半で「私」は「恋愛」について「性的衝動に基づく男女間の愛情。すなわち，愛する異性と一体になろうとする特殊な性的愛。」という辞書の定義から考察する。まず「私」がひっかかったのは「愛する」ということであり，この意味をめぐって「隣人愛」を主張する。次の場面である。

キリストの愛，などと言い出すのは大袈裟だが，あのひとの教える「隣人愛」ならばわかるのだが，恋愛でなく「異性を愛する」というのは，私にはどうも偽善のような気がしてならない。　（傍線部引用者／「チャンス」）

ここで「私」が言う「隣人愛」とは，「十五年間」「苦悩の年鑑」で繰り返し引用されたマタイ伝19章19節「汝等おのれを愛するが如く，汝の隣人を愛せ」のことであり，「キリスト」を「あ

のひと」と呼んでいるようにあくまでも人間関係の中で「隣人愛」が捉えられている。

続けて「私」は「恋愛」の定義のうちで「性的愛」という言葉にひっかかり，「性的」でない「愛」の困難さを次のように言う。

> 「愛」は困難な事業である。それは，「神」にのみ特有の感情かも知れない。人間が人間を「愛する」というのは，なみなみならぬ事である。容易なわざではないのである。神の子は弟子たちに「七度の七十倍ゆるせ」と教えた。しかし，私たちには，七度でさえ，どうであろうか。「愛する」という言葉を，気軽に使うのは，イヤミでしかない。キザである。
> 「きれいなお月さまだわねえ。」なんて言って手を握り合い，夜の公園などを散歩している若い男女は，何もあれは「愛し」合っているのではない。胸中にあるものは，ただ「一体になろうとする特殊な性的煩悶」だけである。（傍線部引用者／「チャンス」）

先程の「隣人愛」では「ひと」としての「キリスト」であったが，ここでは純粋な「愛」が人間には困難であるがゆえに人間の限界を越えた「神」の「特有な感情」とする。マタイ伝 18 章 22 節を引用する際も「キリスト」ではなく「神の子」が「弟子たち」に教えた言葉としており，これまでの人間的な側面とは異なる。ただし，ここで「神」を持ち出したのは信仰の対象としての「神」ではなく，人間の限界を越えた超越的な存在としての「神」であることはいうまでもない。

以上「十五年間」「苦悩の年鑑」「チャンス」の 3 作品にあらわれた聖書引用とキリスト教に関連する言説について確認した。いずれも「隣人愛」をめぐる言説があり，その中で偽善ではなく純粋に他人のために「献身」する「キリスト」へのあこがれが作品の中に垣間見られるところに大きな特徴がある。

3．赦し～「冬の花火」「春の枯葉」

前章の「チャンス」の前後に「冬の花火」「春の枯葉」の 2 編の戯曲が発表されている。両作品とも題名が季節と季節外れのものの組み合わせ，昭和 21 年という戦後の設定，作品の舞台も青森県の津軽地方で屋内という空間設定というように多くの共通点を持っているが，問題となるのはどちらの作品も「赦し」の問題が中心思想となっている点である。例えば「劇界に原子バクダンを投ずる意気込み」[14] で描かれた戯曲である「冬の花火」の中心テーマについて作者は堤重久宛の書簡[15]（1946 年 7 月）で次のように述べている。

> 「冬の花火」正解の鍵は，ルカ傳七章四七，「赦さるる事の少き者は，その愛する事もまた少し」すなはち，罪多き者は，愛情厚しといふところに在るのです。

この作者の言葉がどこまで有効性を持つかどうかは作品の詳細な検討が必要となるが，ともかく「赦し」をめぐる問題が内包された作品であることは確かである。そしてこの問題にかかわるのが主人公の数枝と継母のあさである。

まずは数枝から考えてみたい。昭和21年1月末頃より2月にかけて数枝は6歳の娘を連れて津軽の実家に疎開している29歳の出征軍人の妻である。数枝の夫島田は生死不明のまま3年以上経過しており戦死している可能性が大きい。しかも数枝には東京に恋人がいるらしく，田舎にいながらも東京からの連絡を常に気にしている。父との仲はあまりよくなく，継母のあさは夫と数枝の間に仲裁に入り苦労をしている。そうした中で，田舎での気づまりな生活や，金谷清蔵の強引な求婚，父とのけんかの毎日に飽き飽きした数枝はアナーキズムの桃源郷を夢見る。

（数枝）いいえ，あたしだけが不仕合せなんじゃないわ。いま日本で，ひとりでも，仕合せな人なんかあるかしら。（中略）ねえ，アナーキーってどんな事なの？　あたしは，それは，支那の桃源境みたいなものを作ってみる事じゃないかと思うの。気の合った友だちばかりで田畑を耕して，桃や梨や林檎の木を植えて，ラジオも聞かず，新聞も読まず，手紙も来ないし，選挙も無いし，演説も無いし，みんなが自分の過去の罪を自覚して気が弱くて，それこそ，おのれを愛するが如く隣人を愛して，そうして疲れたら眠って，そんな部落を作れないものかしら。

（傍線部引用者／「冬の花火」）

数枝の「理想郷」は農業を基本とし相互の愛情に支えられた共同社会であるが，どこか武者小路実篤が宮崎県に開墾した「新しき村」を彷彿させる。元々「新しき村」にはトルストイの影響が大きいことからもここで数枝が聖書を引用していることは自然なことかもしれない。数枝はマタイ伝19章19節「汝等おのれを愛するが如く，汝の隣人を愛せ」を踏まえて「おのれを愛するが如く隣人を愛して」と理想郷での人々の生活態度を夢想している。この夢の裏側には「戦後の絶望」[16]があることは言うまでもない。

次に継母のあさである。あさは数枝が小さい時から育ての親としてずっと数枝の味方をしてきた。数枝が弘前の女学校を卒業して東京の専門学校に行く時も，小説家の島田と結婚して学校を中退した時も，睦子が生まれてすぐに島田が出征した時も，反対する夫を説得し密かに援助を続けた。そして数枝が金谷清蔵に迫られた時も包丁を持って追い払ってくれた。だが実は6年前にあさは金谷清蔵に襲われたことで，復讐の機会を狙っていたのである。この告白を聞いた数枝は絶望の底に落ちる。これまで数枝があさから受けていた愛情が嘘だとわかったからである。また，ここには「赦し」をめぐる大きな問題がある。あさは清蔵をどうしても赦すことができないし，数枝もあさを赦すことができない。二人とも「アナーキズムの理想郷」にはふさわしい人物ではなかったのである。そのために数枝の絶望は一層深まる。ただし，あさに関しては別の問題がある。先の太宰の書簡にあったように，あさこそ「罪多き者は，愛情厚し」人物として描かれてい

る点であり，「愛情厚」い人物として後の『斜陽』のお母さまへと形象されていく。

以上のように「冬の花火」は戦後の絶望の中で互いが愛しあい，赦しあえる「アナーキズムの理想郷」を夢見た数枝が，信頼していた継母に裏切られ徹底的な絶望の淵へ陥れられる悲劇が描かれている。「パンドラの箱」が様々な失望や苦難の中から希望を見出すのとは正反対である。

「冬の花火」の次に描かれた戯曲「春の枯葉」も「赦し」に関わるテーマを持っているが，テーマとも深くかかわるタイトルの由来から考えたい。タイトルと関わるのは，主人公の国民学校教師野中が，下宿人の菊代と会話中，自分たちと春の枯葉の共通性について思いを巡らせる場面である。

> （野中）（わざとまじめな顔になって）いや，笑いごとじゃありませんよ。僕たちだって，こんなナンセンスの春の枯葉かも知れないさ。十年間も，それ以上も，こらえて，辛抱して，どうやら虫のように，わずかに生きて来たような気がしているけれども，しかし，いつのまにやら，枯れて落ちて死んでしまっているのかも知れない。これからは，ただ腐って行くだけで，春が来ても夏が来ても，永遠によみがえる事がないのに，それに気がつかず，人並に春の来るのを待っていたりして，まるでもう意味の無い身の上になってしまっているんじゃないのかな。
>
> （傍線部引用者／「春の枯葉」）

このように野中は自分自身が知らない間に既に腐っている存在（＝滅亡している存在）かもしれないと「滅亡の唄」を歌っているのだが，同じように「滅び」の象徴としての植物のイメージは，初期作品の「葉」にも表れていた。

> 「こんな樹の名を知っている？　その葉は散るまで青いのだ。葉の裏だけがじりじり枯れて虫に食われているのだが，それをこっそりかくして置いて，散るまで青いふりをする。あの樹の名さえ判ったらねえ」　（「葉」）

ここで「葉」というタイトルの意味が明らかにされる。表面的には青く生き生きとした葉でありながら，裏は枯れて虫に食われている。生死が表裏一体となった葉のイメージである。「春の枯葉」もタイトルには生命の充溢する春と死を連想させる枯葉という生死が表裏一体となったイメージが込められている。2作品とも葉や枯葉という植物に「滅び」の象徴を見ているのである。同様に，「滅び」のイメージは作品全体を覆っている。「冬の花火」が数枝の嘆きから始まり，絶望に終わったように，「春の枯葉」も野中の嘆きに始まり，野中の突然死で終っているのだ。野中の苦悩が作品全体を覆う通底奏音となっている。

では野中の苦悩はどこから来るだろうか。野中は田舎の旧家野中家の婿養子として家の重圧に日々耐えながら生活している。義母は野中を軽蔑しており，優秀な医学生で病死した息子のこと

ばかりをひたすら考えている。妻もそんな義母に倣い，夫に対して冷たい。しかも家の重圧は戦後になって野中家が没落すればするほど，無力な野中に対する風当たりはますます激しくなる。ここに野中の苦悩がある。そして最後に野中の不満は妻に対してぶつけられる。問題は妻を攻撃する際に聖書を引用している点である。まずは次の場面である。

（節子）（落ちついて）あなたは，はずかしくないのですか？
（野中）（呻く）ううむ，ちえっ，ちくしょう！　（顔を挙げて）全人類を代表してお前に言う。お前は，悪魔だ！
（節子）（冷く）なぜですか！
（野中）わからんのか？　人が死ぬほど恥かしがっているその現場に平気で乗り込んで来て，恥かしくありませんかと聞ける奴あ悪魔だ。
（節子）あなたは，はずかしがっていません。
（野中）どうしてわかる？　どうして，それがわかるんだ。
（節子）（無言）
（野中）イエス答をなし給わず，か。お前のその，何も物を言わぬという武器は，強いねえ。あんまり，いじめないでくれよ。ああ，頭が痛い。
（節子）これから，どうなさるのですか？
（野中）死ぬんだ。死にゃあいいんだろう？　どうせ僕は，野中家の面よごしなんだから，死んで申しわけを致しますですよ。（崩れるように，砂の上にあぐらを掻き）ああ，頭が痛い。切腹だ。切腹をして死んでしまうんだ。

野中は妻に「悪魔」と罵倒した後，無言の妻の様子を今度はピラトから質問を受けたイエスが何の返答もしなかったというヨハネ 19 章 9 節「イエス答をなし給わず」の聖句を引用し揶揄している。つまり，野中は妻の人間らしさを認めたくないので，時には「悪魔」として時には「イエス」としてその非人間性を非難しているのである。この場面に続けて野中は妻の薄情さを一層強く責め立てる。

（節子）だって，あなたたちは，間違った事をしているのですもの。
（野中）聖書にこれあり。赦さるる事の少き者は，その愛する事もまた少し。この意味がわかるか。間違いをした事がないという自信を持っている奴に限って薄情だという事さ。罪多き者は，その愛深し。　（傍線部引用者／「春の枯葉」）

ここで野中は聖書を引用しつつ，妻の薄情さ，傲慢さを非難する。野中がもっとも嫌うのが，妻の中の「偽善」だからである。また，ここには価値観の逆転が見られる。世間的には家庭を顧みない野中が薄情な人物で夫の留守も家庭を守っている妻が立派な人物のように見られるのに，野

中の論理では反対に妻が薄情で野中が愛の深い人物ということになるのだ。こうした価値観の逆転は一見野中の我田引水のようだが元来聖書が内包しているもので，そもそもイエスはユダヤ教社会の価値観を逆転させたためにユダヤ教の指導者たちに嫌われ逮捕されたのである。しかも子の聖句は太宰が「冬の花火」のテーマとしたルカ 7 章 47 節「赦さるる事の少き者は，その愛する事もまた少し」をそのまま引用している点からも「赦し」をめぐる問題を「冬の花火」も「春の枯葉」も共有していることが窺い知れる。そこから考えると野中が妻や家に求めていたのは「赦された」者同士が住む「理想郷」であったのかもしれない。

4．教訓〜「親友交歓」「トカトントン」

『パンドラの匣』における「自由思想」でも，「十五年間」「苦悩の年鑑」「チャンス」における「隣人愛」でも，「冬の花火」「春の枯葉」における「赦し」でも「キリスト」に対する尊敬やあこがれという点では一貫していた。もちろん尊敬というように信仰的要素は薄く多分に人間的要素を含むものではあるが。そして津軽疎開時代の最後に書かれた「親友交歓」「トカトントン」でも「キリスト」の言動に対する尊敬の念は変わらないもののむしろ教訓というレベルで，「偉人」としての「キリスト」から学ぼうとする態度が見られる。

まず「親友交歓」は「昭和二十一年の九月のはじめ」に「津軽の生家」に疎開していた「私」のもとに，「小学校時代の同級生」という「親友」が訪問し秘蔵のウイスキイを飲み干された上に，さんざん悪態をつかれたという「事件」が描かれている。酔っ払って勝手なことばかり言う「親友」に困り果てた「私」は何とか「親友」を追い払おうと考えるが，その時にエルサレムの神殿でユダヤ人から逃れたヨハネ 10 章 39 節のキリストの話を思い出している。

> 卑怯だって何だってかまわない。荒れ馬は避くべし，というモラルに傾きかけて来たのである。忍耐だの何だの，そんな美徳について思いをひそめている余裕は無い。私は断言する。木村神崎韓信は，たしかにあのやけくその無頼の徒より弱かったのだ，圧倒せられていたのだ。勝目が無かったのだ。キリストだって，時われに利あらずと見るや，「かくして主は，のがれ去り給えり」という事になっているではないか。　（傍線部引用者／「親友交歓」）

「木村神崎韓信」とは，それぞれ「木村重成と茶坊主の話」「神崎与五郎と馬子の話」「韓信の股くぐり」といういずれも「無頼の徒」にからまれた人物が忍耐の末に切り抜けるというエピソードであるが，自分を捕えようとしたユダヤ人から逃れたキリストも同列に扱われている。「木村神崎韓信」の 3 人もキリストも「無頼の徒」から逃げたのだから自分が逃げてもおかしくないと正当化しているのだ。

「親友交歓」は教訓と言っても喜劇的要素を含んだ短篇であるが，次の「トカトントン」では戦後の青年たちが抱えたより深刻な問題を扱っている。「トカトントン」は『パンドラの匣』と

同じ書簡体小説であり，青森に住む26歳の青年が自分の悩みを訴えた手紙と手紙を受け取った「某作家」の返信の2通の手紙によって構成されている。

青年の悩みは8月15日正午の玉音放送の時から始まる。日本の敗戦を知った「若い中尉」が戦争は終わっても自分は軍人として死ぬまで戦うという宣言をする。それを聞いた「私」は感銘し，自分も死のうと決意する。その時，どこからか「トカトントン」と金槌で釘を打つ音が聞こえミリタリズムの幻影をはぎとられた。以降，小説を書くことや，郵便局の仕事，恋愛，デモ，スポーツと何かに熱中するたびに，「トカトントン」という音が聞こえ何をする気も無くなってしまう。この頃では頻繁に「トカトントン」という音が聞こえ何も手がつかず，「某作家」に相談の手紙を出したというのだ。

青年の相談に対して「某作家」の返信は次のとおりである。

> 拝復。気取った苦悩ですね。僕は，あまり同情してはいないんですよ。十指の指差すところ，十目の見るところの，いかなる弁明も成立しない醜態を，君はまだ避けているようですね。真の思想は，叡智よりも勇気を必要とするものです。マタイ十章，二八，「身を殺して霊魂をころし得ぬ者どもを懼るな，身と霊魂とをゲヘナにて滅し得る者をおそれよ」この場合の「懼る」は，「畏敬」の意にちかいようです。このイエスの言に，霹靂を感ずる事が出来たら，君の幻聴は止む筈です。不尽。　（傍線部引用者／「トカトントン」）

聖書の文脈に従えば「身を殺して霊魂をころし得ぬ者ども」とは人間のことであり，「身と霊魂とをゲヘナにて滅し得る者」とは神のことである。人間よりも神に対して「畏敬」の念を持てという助言である。そこに戦後の絶望から抜け出す鍵があるというのだ。

お　わ　り　に

以上，津軽疎開時代の太宰文学における聖書引用について検討してみた。改めてこの時期に引用された聖書の個所をまとめてみるとマタイ8箇所，ヨハネ2箇所，ルカ1箇所となる。全て新約聖書の福音書と呼ばれるところであり，しかもほとんどがマタイの福音書からである。つまり，いずれもイエスの言説であるのだ。さらに作品の文脈から引用箇所の意味をまとめてみると，検討したとおり自由思想，隣人愛，赦し，教訓の4つの位相に分類される。それぞれ「自由思想家」としてのキリストや，「おのれを愛するが如く，汝の隣人を愛」する純粋な愛の存在としてのキリスト，赦された者同士が住む理想郷，生きる指針を与えるキリストが作品の中で追求されており，太宰が聖書から深い影響を受けていたことを示している。太宰にとってキリストの言葉が敗戦後の混乱の中に射す「希望」の光であり，生き方の指針であったのであろう。

註

1）解説／『日本の文学 65　太宰治』（中央公論社，1964）の中で次のように述べている。

　聖書の引用句やしばしばキリスト教について書いていることは，太宰が実際上キリスト教の信者だったことを少しも暗示しないどころか，キリスト教を信じたいと欲していたことをさえ暗示しない。キリスト教は太宰の好奇心をそそった。そして太宰は聖書の中に，彼自身の意志と情調を表現するのにふさわしい章句を発見したのである。しかし，彼の私生活でどの程度までキリスト教を信仰することができたにしろ，作品の中では，キリスト教は一種の謎めいた要素であって，重要なものではない。キリスト教について触れることで，太宰は彼が望んでいたような深みを作品に加えることはできなかった。

2）太宰の友人である山岸外史は『人間キリスト記』（第一書房，1938）を刊行している。太宰の弟子である小山清，今官一，菊田義孝はいずれもクリスチャンである。

3）野原一夫『回想　太宰治』（新潮社，1980）

4）津島美知子『回想の太宰治』（人文書院，1981）

5）長部日出雄『桜桃とキリスト　もう一つの太宰治伝』（文藝春秋，2002）

6）清水昭三『椎名麟三の神と太宰治の神』（原書房，2011）

7）研究者の論文は多数あるので，主に単行本になっているものを列挙すると以下の通りとなる。
佐古純一郎『太宰治におけるデカダンスの倫理』（現代文藝社，1958）
菊田義孝『太宰治と罪の問題』（修道社，1961）
清水氾『天井と鉤と影　太宰治論』（修道社，1973）
斎藤末弘『太宰治と椎名麟三』（緑地社，1973）
寺園司「太宰治と聖書」／『文学者と宗教』（笠間書院，1974）所収
佐古純一郎編『太宰治と聖書』（教文館，1983）
赤司道雄『太宰治 ── その心の遍歴と聖書』（八木書店，1985）
福永収佑『太宰治論　キリスト教と愛と義と』（白石書店，1992）
田中良彦『太宰治と「聖書知識」』（朝文社，2004）
笠井秋生「太宰治と聖書」／『二十世紀旗手・太宰治　その恍惚と不安と』（和泉書院，2005）

8）安藤宏は「「八月十五日」と疎開文学」／安藤宏編『展望太宰治』（ぎょうせい，2009）の中で，太宰治を「疎開文学」の系譜として捉え返すという注目すべき論を展開されている。

9）4）に同じ。

10）太宰は小説「親という二字」（初出：「新風」，1946 年 1 月）の中で，『パンドラの匣』を「失恋小説」と呼んでいる。

11）塚越和夫「パンドラの匣」／『作品論　太宰治』（双文社，1974）所収

12）11）に同じ。

13）渡部芳紀「「パンドラの匣」を中心に」（「国文学解釈と鑑賞」，2004 年 9 月）

14）1946 年 5 月 12 日，佐々木金之助宛書簡／『太宰治全集 12　書簡』（筑摩書房，1999）所収

15）『太宰治全集 12　書簡』（筑摩書房，1999）所収

16）「冬の花火」について太宰は井伏鱒二に書簡（1946.5.1）で「戦後の絶望を書いて見ました。」と語っている。